

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1

1 東宝社内で話題作のパンフレットを前にパチリ。仕事柄、役者や監督といっしょになる場面も少なくない。そんな時はさすがに気をつかうという。多忙ながらも充実した日々を伺わせるにこやかな表情が印象的。



2



3

2 長澤まさみ主演の映画「タッチ」の球場での撮影シーン。急きょ観客としてエキストラ出演することに。どんな場面でも臨機応変な対応が求められる映画の世界。この業界にいればこそその稀少な体験も少なくない。

3 懐かしい学生時代の写真。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」のスタッフのみなさんと「ボディロップアスファルト」の和田淳子監督といっしょに記念撮影したときのもの。2列目左から3番目が我妻さん。

大学での学びを通して深まった映画への思い。 大好きな映画の世界で忙しくも充実の日々。

我妻千津子 東宝株式会社宣伝部勤務

実家のある高島町から近く、従兄弟が卒業生という身近さもあってごく自然に山形大学への進学を希望したという我妻さん。映画と文学と美術が好きで人文学部人間文化学科に入学、そこでの出会いや学びによって映画がますます好きになっていったという。特に、中村三春先生の映像論の授業に興味を覚え、卒業論文として「日本インディペンデント映画史」に取り組んだ。中村先生のゼミに入っていなければ映画がこんなに好きになることも、今の仕事に就くこともなかったに違いないと振り返る。大好きになった映画との接点を増やすために大学だけではなく、いろんなところでいろんなことを吸収した。映画館に通い、山形国際ドキュメンタリー映画祭を観に行っ

り、仙台の学生映画祭にスタッフとして参加したり、地元ということで友達も多く、環境も合っていたのでいろんな活動を楽しんでやることができた。

卒論を書くために訪ねた人々との出会いに導かれて最初の就職先が決まり、さらにそこでの経験を生かして東宝宣伝部への入社がなかった。今は、新聞や雑誌などの媒体で映画を紹介してもらうために役者のインタビューをコーディネートしたり、完成披露試写会などのイベントを構築したり、評論家やライターに映画を観てもらってレビューを書いてもらったり、などのパブリシティという仕事をしている。最近担当した作品は「砂時計」「クローズド・ノート」「涙そうそう」など。さらに、「イキガミ」

という松田翔太さんの主演作と「K-20 怪人二十面相・伝」というお正月映画を担当するので、ぜひ観てください」と、ここでも宣伝部としての仕事を忘れない。

大学で学んだ映画論、演劇、美術、各文化演習、それらすべてが展覧会に行ったり、本を読んだりする際の下地になっていて、その知識が仕事にも生かされていると感じるという我妻さん。「大学時代は自分が好きなことを思いっきりできる時期。授業を楽しむのもよし、バイトで社会勉強するのもよし、恋愛で学ぶのもよし、旅するのもよし…。なんでも自分が好きなことを思いっきりやっておけば後悔しないはず」と後輩たちにアドバイス。自ら学生時代を悔いなく過ごして今があるという自信に満ちている。

探究の成果